

# グレース・ボイントンについて

——謝冰心，楊剛との交流を中心に——

牧 野 格 子

は じ め に

1840年のアヘン戦争以後，いくつかのプロテスタント教会を中心とするキリスト教団体が中国に進出し，各地に学校を建て，伝道の拠点とした。英米のキリスト教団体を中心母体とするこれらのミッションスクール<sup>1)</sup>は，キリスト教伝道で成果をあげただけでなく，中国に近代科学など新しい知識，学問をもたらし，多くの優秀な人材を輩出した。

各地に設立されたミッションスクールの中で，北京の燕京大学<sup>2)</sup>は，複数の学校が合併し改革を経て中国随一の大学となった。その発展の歴史において，ジョン・レイトン・スチュワート（1876-1962）<sup>3)</sup>の果たした役割は大きい。彼は校長，教務部長時代を通して，アメリカから多くの援助資金を獲得し，燕京大学の発展を支えた。スチュワート自身，宣教師夫婦の子どもとして1876年中国に生まれた。その一年後一旦アメリカに帰国したが，1904年再び中国に戻り，以後中国におけるミッションスクールの設立などの活動に従事した。途中，アメリカに帰国した時期があるが，スチュワートは1949年まで中国に留まり，40年以上に渡って中国の教育発展に貢献したのである。

スチュワートの下で働き，燕京大学における教育に尽力したアメリカ人女性教師がいた。その女性教師はグレース・M・ボイントン（1891-1970）といい，アメリカのプロテスタント団体から宣教師として派遣された人物

であった。彼女は1919年に中国に渡り、燕京大学の講師となり、1951年までの32年間中国で過ごした。

ポイントンが中国で過ごした32年間は、ほとんどが戦乱の時代であった。特に1930年代以降は日本軍の侵略が迫り、戦争の気配も間近に感じられた。1937年に抗日戦争の発端となった盧溝橋事件が起こり、その後北平（北京）<sup>4)</sup>にも戦火が迫った。

燕京大学の外国人教師にも戦争の足音をいち早く察知し、北平を脱出し、共産党の解放区へ行ったものもいた<sup>5)</sup>。しかしながら、大半の外国人教師は依然として北平に残った。ポイントンも北平に留まり、講義などの教育活動を続けた。

1941年日米開戦を発端に太平洋戦争が勃発し、燕京大学は日本軍に占領された。二十数人の教師と学生が日本軍に逮捕された。その中には、スチュワートも含まれていた<sup>6)</sup>。残された燕京大学の教職員、学生は北平から四川の成都に避難した。その時ポイントンは逮捕を逃れ、移動する燕京大学とともに四川までの過酷な道のを耐え切った。危険が迫る中、ポイントンは燕京大学に残った教職員、学生と命運を共にしたのである。

ポイントンはなぜ危険を冒してまで、アメリカに帰国するという選択肢を取らず、燕京大学に留まったのだろうか。それは彼女の宣教師としての使命感に理由を求めることができるだろう。中国におけるキリスト教伝道のために一生を捧げることである。ポイントンは1951年にアメリカに戻るが、それは彼女自身の眼病治療のためであった。彼女としては許される限り中国でのキリスト教伝道と教育活動を続けたかったのだろう。

ポイントンが32年の長きに渡って中国で過ごしたもう一つの理由を中国や中国人に対する強い思いに見ることができるだろう。英語教師として、実際に中国人学生達と触れ合う中で、中国や中国人に対する強い思いを培っていったのだろう。

ポイントンの中国に対する強い思いは如何なる質のものだったのだろう

か。それを彼女と中国人学生の具体的な交流の中に見出そうと思う。

具体的な例として、ボイントンには二人のお気に入りの学生がいて、その学生達との交流が挙げられる。一人は中国現代文学を代表する女性作家のうちの一人である謝冰心(1900-1999)<sup>7)</sup>であり、もう一人は新聞記者兼作家である楊剛(1909-1957)<sup>8)</sup>であった。ボイントンと楊剛に関しては、蕭乾がかつて「楊剛与包貴思——一場奇特的中美友誼」<sup>9)</sup>という文章を書いた。その文章には、ボイントンと楊剛の間で築かれた友情が詳しく書かれている。

本論文では、ボイントンと楊剛だけでなく、ボイントンと謝冰心との交流に注目する。ボイントンと楊剛、謝冰心との交流から、ボイントンの中国と中国に対する思いが如何なる質のものであったかを探るつもりである。さらにボイントンはこの二人の学生に何をもたらしたのか、ボイントンが中国に対して抱いた思いは如何なる意味があったのかということも探っていくつもりである。

中国で生きた宣教師兼教師の一つの例として、ボイントンの中国での時期を見ることが出来るだろう。彼女が生きた時代が、18世紀後半以来プロテスタントの宣教師達が築き上げたキリスト教教育の歴史の一部として重要なものであると考えるからである。

## 第1章、ボイントンとその背景

### 1、ボイントンの略歴<sup>10)</sup>

グレース・M・ボイントンは1871年、マサチューセッツ州ブルックラインの牧師一家に生まれた。彼女の父は、会衆派教会(Congregational Church)<sup>11)</sup>所属のネヘミヤ・ボイントン牧師(神学博士)である。

彼女は1912年ウェルズリー・カレッジを卒業した後、ラドクリフ・カレッジとミシガン大学で修士号を取得した。その後トルコ、イスタンブールにあるコンスタンティノーブル大学で教えた。1919年会衆派宣教師として、

かねてから興味があった中国へ渡り、協和女子大学（のち燕京大学に吸収合併）の英語教師として赴任した。彼女を中国へ派遣したのは、American Board Commissioners for Foreign Missions（以下、アメリカン・ボードと称する）<sup>12)</sup>という団体であった。

1919年以後、ボイントンは燕京大学でスチュワートの部下として、30年以上に渡り英語、英文学教育に携わった。その間、様々な歴史的事件が起こり、彼女の教師生活は激動の時代に呑み込まれていった。

1937年の盧溝橋事件勃発後、ボイントンは北平（北京）に留まった燕京大学とともに残った。1941年、太平洋戦争が勃発し、燕京大学は日本軍に封鎖された。スチュワート（当時は教務総長）や数人の外国人教師が日本軍によって囚われの身になった。その後、燕京大学の一部の教員、学生は南へ避難し、四川の成都に移動した。ボイントンもそれに伴い、成都に避難していった。1945年抗日戦争勝利後、燕京大学とともにボイントンは成都から北平に戻った。

1950年2月、ボイントンは眼病を患い、その治療のためアメリカに帰国した。同年11月、中国へ戻ろうとしたが、朝鮮戦争勃発のため、香港で足止めを食い、やむを得ず日本へ向かった。日本では神戸女学院で数ヶ月教えた。

翌年の1951年、眼病が再発したためアメリカに戻った。ボイントンは二度と中国に戻ることはなかった。

アメリカ帰国後は、アメリカン・ボードを辞し、中国の情勢についての記事を書くなどして暮らしていた。1970年、アメリカ、コネティカット州の老人ホームにて死去した。享年79歳だった。

## 2. 二人のお気に入りの学生

序章ですでに述べたとおり、ボイントンにとって印象深く、また誇りに思う教え子が二人いた。その二人とは一人は謝冰心であり、もう一人は楊

剛であった。

ポイントンに関して、彼女の別の教え子である杜栄<sup>13)</sup>が後年になって書いた文章がある。そこには、ポイントンの謝冰心、楊剛に対する思いを書いた箇所がある。

彼女（ポイントン、引用者注）は二人の学生について最も頻繁に語っていたのを覚えている。一人は有名な女性作家である謝冰心である。冰心大姐は彼女が初めて燕京大学に来て教えたクラスの最も優秀な学生であった。二人目は“宝子”といい、当時私がただ知っていたことは、もう一人の自慢の学生の娘の名前だということだった。ポイントンの家で彼女によって育てられていたこの“宝子”という子どもが、ずっと後になって楊剛女史の娘であることを知った。楊剛は早いうちから革命に参加し、この子どもをポイントンに預けたのである。“宝子”は彼女によってしばらくの間大切に育てられた。

二人のことに触れるたびに、先生の顔は得意満面になり、非常に誇りに思っているという印象を人々に与えたのである<sup>14)</sup>。

ここに引用された謝冰心は中国現代文学を代表する作家の一人であるし、楊剛も燕京大学卒業後、著名な新聞記者兼作家となった。有名かつ優秀な教え子について語るのとはそれだけでも誇らしいことである。しかし、二人の教え子に対する思いはそれだけではない。楊剛については彼女の娘をポイントンが預かったという事情がある。

では、ポイントンと謝冰心、楊剛とのそれぞれのつながりは如何なるものだったのだろうか。次章では、まずポイントンと謝冰心との交流を詳しく見ていく。

## 第2章、ポイントンと謝冰心

謝冰心はポイントンが中国に赴任したとき最初に教えた学生であった。ポイントンと謝冰心との交流はそれ以来の長いものであった。謝冰心が燕京大学を卒業する直前、ポイントンはアメリカ留学の話を持ちかけた。ポイントンは謝冰心の人生にも大きな影響を与えたのである。

ポイントンは優秀な学生であった謝冰心に白羽の矢を立てたのである。ポイントンが謝冰心を選んだ理由は、謝が優秀だっただけではない。彼女は燕京大学時代やそれ以後にキリスト教の影響を受けた作品を多く執筆したということも理由となるだろう。特に燕京大学在学中、北京基督教連合会が出していた『生命』や他の雑誌に掲載した<sup>15)</sup>。

謝冰心は成績優秀で、しかもキリスト教関連の活動にも積極的に参加していた。ポイントンはそうした謝冰心に自ら卒業した大学で学ばせようとした。それは、謝冰心により飛躍し、よりキリスト教と近い存在になって欲しいとの大きな期待をかけていたからであろう。

謝冰心にとっても、ポイントンの存在は印象深いものであった。1980年代に至っても、ポイントンによって受けた恩を忘れず、それを回想の文章で書き記したのである。

ポイントンと謝冰心の交流はアメリカ留学以後も続いた。

1926年に謝冰心はウェルズリー・カレッジから修士号を授与され、7月に帰国した。1929年6月謝冰心は同じくアメリカ留学生だった呉文藻と結婚した。呉文藻とはアメリカへの船上で出会った。彼はコロンビア大学大学院で博士号を取得し、謝冰心より3年遅れて帰国した。二人の結婚式にはポイントンも参加した。

その後社会情勢は劇的に悪化していった。1937年の盧溝橋事件後、北平は日本軍に占領された。他の大学は南へ避難し西南聯合大学となったが、燕京大学は北平に留まり講義を続けた。

1938年、呉文藻が雲南大学の社会人類講座の教授になったのを機に、謝冰心一家は北平を脱出した。彼女達は雲南の昆明に移った。北平に留まったボイントンは39年昆明にいた謝冰心一家を訪ねた。

1944年春、当時北平から成都に避難していた燕京大学に謝冰心が来校し講演を行った。謝冰心一家は当時雲南の昆明から四川の重慶へ移っていた。同じ省内の重慶から成都まで訪れたのである。

1938年と44年のことについて書かれた二編の文章から、ボイントンの謝冰心に対する思いを見て行く。

最初の文章は、ボイントンが雲南の昆明にいた謝冰心一家を訪ねたときの様子を書いた手紙である。ボイントンは1939年に謝冰心一家を訪ね、後にウェルズリー同窓会宛にこの時の様子を知らせる手紙を出した。当時の謝冰心の様子を以下のように書いている。

婉瑩（謝冰心の本名、引用者注）は村の学校で40人の生徒に教えています。全員男子生徒です。彼女が田舎の学校で先生をしているのは、何だかエドナ・セント・ビンセント・ミレーにニューイングランドの伝統的な小さな赤い校舎で先生をさせるようです！しかし婉瑩はその村で教育に貢献し、生活や新秩序を共にすることに限りなく誇りを持っているのです。その一方彼女は、北方で別の仕事にすべてを注いでいる我々に対して深い尊敬と同情をいまだに抱いているのです<sup>16)</sup>。

エドナ・セント・ビンセント・ミレー<sup>17)</sup>は、192、30年代に活躍したアメリカの女性詩人である。詩人でもあった謝冰心をこのアメリカの女性花形詩人になぞらえることで、ボイントンの謝冰心に対する敬意の念を見て取れる。現にボイントンは謝冰心の詩集『春水』<sup>18)</sup>を英訳している。謝冰心の才能を大いに認めていた。ボイントンにとって誇りであるウェルズリーの同窓生、キリスト教を通じた仲間である謝冰心をアメリカの人々に紹

介しようと努めたのである。

ボイントンは、謝冰心の昆明での教師生活を報告しながら、互いの絆の強さを述べている。お互いの苦労多き生活を思い遣っているのである。ボイントンから見た感想ではあるが、謝冰心に対する思い入れの深さを見られるだろう。

もう一編の文章は、1944年春、謝冰心が北平から成都に避難していた燕京大学を訪ね、講演をしたときのことを書いたものである。そのときの様子を燕京大学の学生であった杜栄が以下のように書いている。

たぶん1944年の春、冰心大姐が来校し講演を行った。あの小さな講堂は学生達でいっぱいになった。ボイントン先生もやって来て、講堂の後ろのほうの目立たない席に座った。冰心大姐は多くの燕園（燕京大学の住宅地区、謝冰心一家を始めとする多くの教員が住んでいた、引用者注）が初めて造られたときの昔話を語り、特に燕京大学で最長老は勿論スチュワート教務長であり、その次に来るのは Miss Boynton だと語った。続けて冗談らしく「燕京で Miss Boynton は ‘一人の下におり、万人の上にいる’ ということになる」と言った。このとき一部の学生は振り返り、尊敬の眼差しでボイントン先生を見ていた。すると彼女はずっと頷き、顔には満面の笑みを湛えた。これは彼女の最も誇りとする弟子が彼女に表した敬意でもあり、彼女が教えたすべての弟子の彼女に対する敬意でもある。彼女は どうして嬉しくないことがなどあるだろうか、自ら誇りに思わないことなどあるだろうか<sup>19)</sup>。

この文章中の特に ‘一人の下におり、万人の上にいる’ という言葉から、ボイントンがスチュワートの部下として全ての学生から尊敬される存在であったことがわかる。謝冰心はこの言葉で、ボイントンに対する深い尊敬の念を示している。そして、その敬意を目の当たりにしたボイントンの誇



らしげな様子がよく伝わってくる。ポイントンは謝冰心が自ら教え導いた弟子であることに喜びを感じ、彼女に対する全面的な信頼を寄せているのである。

ポイントンと謝冰心の間にあった深い敬意はどこにその出発点を見出すことができるのだろうか。それには、彼女達をつなぐもう一つの要素であるキリスト教に求められるかもしれない。

謝冰心は燕京大学在学中にキリスト教の洗礼を受けたといわれている。それもポイントンの勧めで洗礼を受けた。謝冰心がキリスト教徒であるか否かについては、いまだに事実として定まっていない。だが、もし謝冰心がポイントンの付き添いで洗礼を受けたとすれば、ポイントンの宣教師としての役目が果たされたということになる。ポイントンが故郷アメリカを離れ、遠き東の国の中国にやってきたのは、キリスト教伝道のためであった。中国人をキリストの道へ導くことは彼女の使命なのである。ポイントンにとって謝冰心は自ら親しく接し洗礼まで導いた最初の学生であったのかもしれない。だからこそポイントンは謝冰心のことを自らの学生であるだけでなく、宗教を同じくする「仲間」だと思っていたと考えられるのである。

しかし謝冰心の受洗が事実でなかったとしても、上述したように彼女は燕京大学時代やそれ以後にキリスト教の影響を受けた作品を多く執筆した。その背景には謝冰心がそれ以前に通っていた貝満中学もミッションスクールだったこともあげられる。また、家庭環境にもキリスト教の影響があった。謝冰心の叔父がキリスト教徒であり、彼女の母親もキリスト教徒であった可能性が指摘されている<sup>20)</sup>。

ポイントンと謝冰心の間にはキリスト教という共通する要素があった。故にポイントンは謝冰心にウェルズリー・カレッジへの留学を勧めたのだろう。二人のつながりは深く、長く続くものであった。ポイントンにとって謝冰心は優秀な学生であり、素晴らしい才能を持つ詩人であり、誇らし

い「仲間」であったのである。

### 第3章、ボイントンと楊剛

ボイントンのもう一人の自慢の学生は楊剛である。ボイントンと楊剛の交流については上述のとおり蕭乾が詳述している。彼の文章は、ボイントンの小説“*The River Garden of Pure Repose*”（以下、*The River Garden* …と表記、筆者）と楊剛のボイントン宛の手紙とアメリカの中国学者であるフィリップ・ウェスト氏が書いた“*Yenching University and Sino-Western Relations, 1919-1952*”（以下、*Yenching University* と表記、同）を元にしていて、ウェスト氏の著作は燕京大学全般のことが書かれているが、ボイントンの日記を入手し、書いた箇所がある。ここでは蕭乾の文章、ボイントンの小説、ウェスト氏の著作、楊剛の小説を元にボイントンと楊剛の関係を見ていく。

ボイントンと楊剛との交流は勿論燕京大学時代から始まっている。1928年楊剛が燕京大学に入学してから32年に卒業するまで、ボイントンと楊剛は英語教師とそのお気に入りの教え子という関係であった。

前述の蕭乾の文章によると、彼は1929年の冬初めて楊剛に出会った。それはボイントンが主宰していた英語詩朗読会でのことであった。ボイントンは英語詩に関しては厳しい人であった。朗読会はボイントンが住んでいた部屋で行われていた。参加していた他の学生も蕭乾もボイントンの厳しさを恐れ、後方に座っていたという。しかし一人の女子学生だけが物怖じせず堂々とボイントンの前に座っていた。それが楊剛だった。

ボイントンと楊剛が普通の師弟関係に止まらないのは、楊剛の娘をボイントンが数年間預かったという事実が示している<sup>21)</sup>。楊剛の娘、鄭光迪（1934-）は1937年の盧溝橋事件の後、ボイントンに預けられた。彼女は当時3、4歳だったという。

当時共産党員として活動していた楊剛は盧溝橋事件勃発を受けて、危険

を感じ逃亡することにした。しかし幼い娘を連れて行けず、やむを得ずポイントンに預けた。

ポイントンは細心の注意を払って鄭光迪を育てた。食事にも気を使い、西洋式のマナーを教え込んだ。鄭光迪は数年後、祖父母の元に戻っていった。

ポイントンが楊剛の娘を預かったという事実だけでも、ポイントンと楊剛のつながりの深さを示しているが、ポイントンにとってもこのことは印象に残るものだったのだろう。現にポイントンは自らの小説、“The River Garden …”で、この事実をモデルにしたと思われるエピソードを描いている。

この“The River Garden …”という小説であるが、ポイントンの帰国後の1952年、Mcgraw Hillという出版社から発行されている。彼女が書いた個人履歴によると、正式に書籍として出版される1年前の1951年9月、“The Ladies Home Journal”にこの小説の要約が掲載された。

物語はポイントン自身をモデルにしたと思われる主人公、Jane Breasted（以下、ジェーンと表記、筆者）という女性が四川の美しい中国式庭園を持つ家に病氣療養のため身を寄せるところから始まっている。このジェーンはクエーカー教徒の宣教師兼英語教師であった。身を寄せた家は彼女の教え子の実家である。彼女の元には友人で看護婦であるブリジッタとジェーンのいとこのスティーブンが出入りする。

しばらく療養していたジェーンの元に、かつての教え子 Willow（以下、ウィローと表記、筆者）が逃げ込んでくる。このウィローという登場人物は中国人である。ウィローは英語で楊柳という意味である。ウィローは楊剛をモデルにした人物と思われる。ウィローは共産党員で身重であった。後に彼女は子どもを産みその子をジェーンに預けて去っていく。

ウィローが子どもを産むまでに、ジェーンとウィローの見解の齟齬を示す場面が多く描かれる。キリスト教の宣教師と共産党員では信じる対象の

違いから見ても当然のことであった。しかしながらジェーンはウィローとの友情を信じていた。蕭乾も指摘しているように、ポイントンはこの小説を通して、楊剛の共産党に対する忠誠心を描き、それに対し感動を抱き、敬意を示したのである。

一つの例として、ジェーンのウィローに対する敬意を示す箇所は以下の通りである。

ジェーンは考えて、言った。「私は宣伝者で、柳も宣伝者だわ。彼女は宣伝のためなら大きな犠牲を払うのは必要だと思っているけど、私は宣伝のために何も犠牲にする必要はないと考えるの。私は彼女と同じく中国人民の生活がよくなることを強く望んでいるの。私は彼女の勇敢さと忠誠心をとても尊敬しているわ。」<sup>22)</sup>

これはフィクションであり、この場面が実際にあったか否かは明言できない。しかしポイントンはわざわざ自らの小説にこうした会話を挿入した。そこから、楊剛に対する思い入れの深さを見て取れる。

これ以後もポイントンと楊剛の交流は続いた。1945年楊剛がポイントンに当てた数通の手紙でも齟齬を越えて培っていた友情を見て取れる。その数通の手紙で楊剛は抗日戦争勝利後中国が置かれた状況に関していくつかの意見を述べている。例えば国共内戦前夜の緊迫した状況の中で、楊剛はアメリカによる対国民党援助について、

この政権の狙いはどうやら将来中国政権を利用してソ連を攻め、(略) アメリカの平和を維持することのようです。彼らは天真爛漫に平和の防衛者とうぬぼれているのです。アメリカの知識分子及び宗教界の人士は手をこまねいて見ているだけです。彼らの軍隊が国民党を助け、中国人民の心中の希望を潰すのを何もせずに見ているだけです。

もしイエスがこの世に生きていたら、この事態を目にしてきっとひどく悲しみ憎むことでしょう<sup>23)</sup>。

と痛烈な批判をしている。イエス・キリストを引き合いに出してまでアメリカ政府や知識人、宗教界人士を非難することがポイントンの心を傷つけることを分かっているながら、楊剛はかくも自らの思想に忠実だったのである。

ウェスト氏の著作、“Yenching University”によると、国共内戦終結後、中国人民解放軍が燕京大学に駐留し、ポイントンは新たな時代に向けて毛沢東、レーニン、スターリンの著作を読み共産党が行う「検討（自己批判）」大会にも興味を抱いたという。彼女は共産主義の書物を読むことで、「退廃したキリスト信仰が毛沢東やスターリンの偶像に取って代わられること」<sup>24)</sup>を嘆いた。ポイントンは、中国におけるキリスト教の領域であった燕京大学に解放軍が入り、同時に自らの心にも共産主義が入り込む気配を感じたのである。それはキリスト者にとってあるまじきことであった。

ポイントンのこうした変化について、ウェスト氏は「20年以上に渡る楊剛との友情」が大きく関わっていると指摘している。それだけでなくポイントンは中国が迎える新たな時代やそれを体現する自らの教え子をより深く理解しようとしたと考えられる。さらに彼女は自らの内なる変化に戸惑いながら、同時にキリスト信仰に対する少しばかりの懐疑を抱いたのである。

最後にポイントンと楊剛が会ったのは1951年1月であった。それはポイントンが眼病治療のためアメリカへ帰る直前のことであった。二人は友人宅で食事をした後、深夜まで話しこんだ。互いに深い友情で結ばれているとは分かっているものの、中国やアメリカの情勢の話題になると案の定議論となった。

だがポイントンは当時の楊剛のシンプルな生活に感動していた。ポイン

トンが家財道具や財産を持たない楊剛に援助を提供しようとしたところ、楊剛はそれを断った。ポイントンは怒りを感じた。しかし在中外国人について、ポイントンが「私達への特別保護と特権を最後には進んで差し出さねばならない」と言ったところ、楊剛はこう答えた「その言葉にととても感動しました。なぜなら誠実な言葉だからです。しかし何人の宣教師がそう思うでしょう？」<sup>25)</sup>ポイントンは中国で外国人が法外な保護と優待を受けてきた時代がすでに過ぎ去ったことを感じていたのである。これも楊剛への理解のため共産主義の書物を読んだ結果であろう。

キリスト教への信仰篤きポイントンと共産党員の楊剛には永遠に一致し得ない違いがあった。だがポイントンは違いを超えたところで楊剛と友情を結んだ。ポイントンは楊剛を受け入れ、楊剛が主張する政治思想も受け入れた。

一方楊剛はポイントンとの友情について多くを語らなかった。蕭乾はかつて楊剛になぜポイントンと親交を結んでいるのか尋ねたが、彼女からはっきりした答えは得られなかったという<sup>26)</sup>。しかしポイントンの相手を受け入れる心が楊剛の心に響くものがあったに違いない。だからこそ楊剛はポイントンとの付き合いを断つことはなく深く信頼し交流し続けたのである。

## おわりに

ポイントンは、1951年に故郷アメリカに戻った後、アメリカン・ボードを辞し、キリスト教伝道から引退してしまった。中国から帰国し、外国伝道という自らの使命がなくなってしまったからであろう。その後ポイントンは中国に関する文章の執筆などで過ごした。実際に中国に住み激動の時代を目の当たりにした人間として中国の情勢を詳しくアメリカの人々に伝えたのである。

そして、1952年には前述の“The River Garden …”という小説を上梓し

た。この小説はポイントンにとって、中国での生活を総括する意味もあっただろう。中国がすでに遥か遠くなってしまっただけから、中国を見つめつづけたのである。その眼差しはポイントンが中国にいた間に感じていた中国に対する強い思いと同質のものであったのかもしれない。

ポイントンは謝冰心とはキリスト教を通じて深いつながりを結んだ。燕京大学在学中に謝冰心はキリスト教の影響を受けた作品を多く書いた。それにはポイントンの影響もあったかもしれない。楊剛とは思想と宗教の対立を経てもつながりを保った。

そこにポイントンの懐の深さを見ることができる。その根底には前出の杜栄が「いわゆるキリスト教の博愛精神だったかもしれない（略）彼女（ポイントン）は私に対し直接キリスト教の教義を宣伝したことはない。彼女はいつもの愛情で人を気遣い、影響を与えた。」<sup>27)</sup>と言ったとおり、キリスト教信仰に基づいた大きな愛と強さがあったからに違いない。さらにポイントンは相手の思想の自由を尊重し、宗教を押し付けるということはしなかった。その姿勢は神の前では全ての人は平等であるというキリスト教の基本的な精神から来ている。

1840年以来多くのアメリカン・ボードや他のキリスト教団体の宣教師が来華し、多くの艱難を乗り越えて伝道活動をした。宣教師は自らの人生を賭けて海を渡り、時に伝道活動の中で命を落とすものもいた。ポイントンも勇気ある宣教師達の系譜に繋がる女性宣教師である。

彼女の勇気と覚悟はただ純粹に信仰の喜びを伝えるという信念に基づいている。ポイントンの強い覚悟と相手の意志を尊重する広い心に触れた人々は強く影響された。ゆえに杜栄が言うように、「燕大の英文学科の先生と学生はみな非常に彼女を尊敬」<sup>28)</sup>した。だからこそ、ポイントンの存在は、謝冰心、楊剛を初めとするポイントンの教え子それぞれに深い印象と重要な意味を与えたのである。

## 注

- 1) 中国におけるキリスト教伝道史については、孫尚揚、鐘鳴旦『一八四〇年前の中国基督教』（学苑出版社、2004年4月）を参考にした。1840年以後のミッションスクールの歴史に関しては、山本澄子『中国キリスト教史研究——プロテスタントの「土着化」を中心として』（近代中国研究叢刊、東京大学出版会、1972年12月）、佐藤尚子『米中教育交流史研究序説——中国ミッションスクールの研究——』（龍溪書舎、1990年）を参考にした。
- 2) 燕京大学は、1889年成立した華北通州協和大学（The North China College）と1870年成立した北京彙文大学を母体としている。華北通州協和大学は公理会（アメリカン・ボード）が創った学校であり、北京彙文大学は美以美会（メソジスト会）が創った男子校であった。これら二つの学校は1919年に合併し、燕京大学となった。1920年には、華北女子協和大学が加入、合併して編成されて一大教育機関となった。華北女子協和大学は、ブリッジマン・スクール（公理会の宣教師、ブリッジマンの妻が創った学校）を起源とする。  
以上、燕京大学については、夏自強「燕京大学概述」（『燕京大学人物志』第一輯、北京大学出版社、2001年）、秦孝儀主編『中国現代史辞典 史事部分（一）』（近代中国出版社、中華民国76年（1987年）、尚海、孔凡軍、何虎生主編『民国史大辞典』（中国広播電視出版社、1991年9月）を参考にした。
- 3) スチュワートと謝冰心の関係に関しては萩野脩二「謝冰心とスチュワート——燕京大学を中心に」（『関西大学 文学論集』第54巻第4号、2005年3月）に詳しく書かれている。
- 4) 蒋介石率いる国民革命軍は1928年北伐を完成し、南京に政府を置いた。同年4月20日、北京を北平と改称した。のち1949年までこの呼称が使われた。これに従い、本論文では、1928年から49年までの北京を北平と表記する。
- 5) 例えば、燕京大学数学科の教授であったラップウッド（Ernest Ralph Lapwood 1909-1984）は、1939年中国共産党の解放区へ向かった。他の3人とともに、北平を脱出し晋東南八路軍の本部に至った。1942年ラップウッドらは成都に避難した燕京大学と合流した。ラップウッドはその後北平を脱出したときの模様を「1939年逃出北平記」にまとめている。以上、ラップウッド著、孫幼雲訳「1939年逃出北平記」、孫による前言を参考にした。
- 6) 1941年太平洋戦争勃発時、12月8日燕京大学は日本軍によって封鎖された。アメリカとキリスト教勢力から援助を受けていた燕京大学は敵国の教育機関とされたのである。まず学生と研究院生が逮捕され、陸志韋、陳其田などそ



れぞれの研究院長が逮捕された。スチュワートは天津で逮捕され、北平に監禁された。後1945年にスチュワートは釈放された。以上、成恩元「“一二・八”燕園淪陥記」(『燕大文史資料』第八輯, 北京大学出版社, 1994年), 「司徒雷登」(『燕京大学人物志』第一輯, 北京大学出版社, 2001年)を参考にした。

7) 謝冰心の経歴に関しては拙著「謝冰心のアメリカ留学——出発前の状況——」(『千里山文学論集』第64号, 2000年9月)を参照されたい。

8) 楊剛は1909年江西に生まれた。原名は楊季徽, また楊績といった。楊剛はペンネームである。5歳で家塾に入り古典文学に親しんだ。1928年燕京大学に入学, 英文学を学んだ。同年中国共産党に加入した。30年に国民党に逮捕され, 救い出されたが, 共産党とのつながりを失った。32年燕京大学を卒業後, 北方左翼作家聯盟の結成に参加した。33年上海で中国作家聯盟に加入した。38年再度中国共産党に加入した。その間32年に北京大学経済学科の鄭侃と結婚し, 34年一女(鄭光迪)を生んだが, 37年に離婚した。

1939年蕭乾のあとを継いで香港『大公報』副刊「文芸」の主編となった。後, 桂林版『大公報』文学副刊の主編となった。43年重慶で周恩来の指導の下, 『大公報』の記者となり抗戦工作を行った。44年アメリカのラドクリフ・カレッジに留学し, 『大公報』駐米記者を兼任した。

1948年帰国し, 香港『大公報』に戻った。49年初め, 彼女は天津『大公報』から『進歩日報』への改組活動に従事し, 『進歩日報』党組書記, 編集長を務めた。49年新中国成立後, 彼女は外交部に転属になり, その間, 燕京大学で培った英語能力を生かし, 周恩来首相が主事する外国政策研究委員会の秘書となった。53年中央宣伝部国際宣伝処長となり, 55年『人民日報』の副編集長となった。同年交通事故に遭い, 後遺症が残った。57年10月7日楊剛は突然この世を去った。死因は自殺とされているが今でも謎が残っている。代表作に《肉刑》, 《楊剛文集》などがある。

以上の記述は, 楊剛著『挑戦』(盧豫冬訳, 人民文学出版社, 1988年), 秦孝儀主編『中国現代史辞典 史事部分(一)』(前出), 尚海, 孔凡軍, 何虎生主編『民国史大辞典』(前出)を参考にした。

『挑戦』は楊剛の自伝的小説である。1944年から48年楊剛はアメリカ留学中自らをモデルに英語よる小説を執筆した。楊剛が帰国時アメリカの友人に預けていた。その友人が78年に亡くなったときに発見された。その後中国語に訳され中国で出版された。

9) 蕭乾「楊剛与包貴思——一場奇特的中美友誼」(原載『新文学史料』1982

年第2期 p 121~p 127, 『燕大文史資料』第2輯, 北京大学出版社, 1991年 p 126~p 138に転載)

10) この箇所に関しては, ウェルズリー・カレッジ・アーカイブ提供の資料, ボイントン本人が書いた個人履歴 (“Personal Record”), 1971年の死亡記事を参考にした。他に Philip West “Yenching University and Sino-Western Relations, 1919-1952” (Harvard University Press, 1976) を参考にした。

11) 会衆派教会は, キリスト教, プロテスタントの一派で, イギリスでルターの宗教改革の影響を受けて起こった分離派改革運動を源流とする。エリザベス一世統治下の英国国教会を批判し, 各教会の自主独立を標榜, 実践するのを目指した。後に分離派は国家に弾圧され, 一部の人々は弾圧を逃れて1620年にアメリカ大陸に渡った。この人達がピルグリム・ファーザーズである。

ピルグリム・ファーザーズはニューイングランド地方に根ざし, 会衆派と称した。後にアメリカの政治や社会に大きな影響力を持った。

会衆派は神学教育だけでなく, 一般教育に力を入れ, ハーバード大学, イェール大学, アーモスト大学, オベリン大学などを設立した。

以上, 土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』(新教出版社, 1980年) を参考にした。

12) アメリカン・ボードは1810年マサチューセッツ州ボストンで設立された外国伝道団体である。アメリカン・ボードは, 会衆派, 長老派, オランダ教会などが参加してできた団体であるが, 事実上教派を超えた組織であった。

中国では, アメリカン・ボードから1829年最初の宣教師として Elijah C. Bridgman が広東に到着した。続いて Samuel Wells Williams と Peter Parker が渡来した。1864年アメリカン・ボードは北京に女子学校 (The Bridgman School, 後の華北協和女子大学) を設立した。

アメリカン・ボードは中国では公理会と呼ばれ, 当初, 主に会衆派と長老会から構成されていたが, 後に長老会が独自の布教団体を作ったため, 組織は会衆派からのみになった。

以上, 山本澄子前掲書, 塩野和夫『19世紀アメリカンボードの宣教思想 1810~1850』(新教出版社, 2005年), 同志社大学人文科学研究所編『アメリカン・ボード宣教師——神戸・大阪・京都ステーションを中心に, 1869~1890年』を参考にした。

13) 杜栄という人物に関しては未詳。

14) 杜栄「包貴思」(『燕京大学人物志』第一輯, 北京大学出版社, 2001年4月) p 145~p 147

15) 『生命』は、北京基督教学校事業連合会が出した雑誌である。他に謝冰心は『燕京大学季刊』に基督教の影響が見られる作品を発表している。

16) グレース・ボイントンの手紙（1940年8月、Wellesley College Alumni 同窓会宛）より。

17) エドナ・セント・ビンセント・ミレー（Edna St. Vincent Millay, 1892-1950）はアメリカの女性詩人である。彼女は1892年にアメリカ、メイン州に生まれた。彼女が幼い頃両親が離婚し、母のもとで育てられた。ミレーが高校生のとき書いた詩が注目され、最初の詩である“Renascence”がYMCAのスタッフの目に留まり、大学進学 of 奨学金を得ることができた。1913年から17年までミレーは名門女子大学の一つであるヴァッサー・カレッジに在籍し、最初の詩集“Renascence and Other Poems”を出版した。卒業後、ミレーはニューヨーク市に移り、終生グリニッジ・ビレッジを活動の場とした。代表作に、“The Princess Marries the Page”, “Second April”などがある。

以上、“Anthology of Modern American Poetry”（Oxford University Press, 2000）『世界文学大事典4』（集英社、1997年）を参考にした。

18) “Spring Water” by Ping Hsin, translated into English by G. M. Boynton. Privately printed, Peking, 1929. この本は自費出版されたもので、ウェルズリー・カレッジ図書館に所蔵されている。

19) 前出、杜栄「包貴思」

20) 謝冰心の母が基督教徒であった可能性は、萩野氏前掲論文（注3参照）で指摘されている。

21) このことに関しては、蕭乾の文章に書かれている通り楊剛の娘自身も証言している。蒲耀瓊という人物の文章には、ボイントンの家に楊剛の娘がいたことが書かれている。

22) 前出、Grace M. Boynton “The River Garden of Pure Repose” p 192~p 193

23) 前出、蕭乾「楊剛与包貴思——一場奇特的中美友誼」

24) Philip West “Yenching University and Sino-Western Relations, 1919-1952” (Harvard University Press, 1976) p 226

25) 同上 p 227

26) 前出、蕭乾「楊剛与包貴思——一場奇特的中美友誼」 p 121

楊剛にボイントンとの友情に関して尋ねたときのことを蕭乾は次のように書いている。「何年も私の心の中にずっと謎が残っていた。共産党員の楊剛がなぜ信仰の篤いボイントンとそれほど親しかったのか？ 私はかつて楊剛に尋ねたことがあるが、彼女はこの話題に関して多くは語りたがらなかった。

(略) 彼女が世を去るまで、この謎は最後まで解かれなかった。」

27) 前出, 杜栄「包貴思」

28) 同上